

親と乳児との遊びについての実態調査

著者	大元 千種
雑誌名	筑紫女学園大学紀要
巻	17
ページ	265-284
発行年	2005-01-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000916/

親と乳児との遊びについての実態調査

大元千種

Empirical Study on Parents' Play with their Children

Chigusa OHMOTO

問題意識

乳児にとってのあそびは、幼児のそれとは異なった意味をもっている。まず第一に、あそびの特性から考えられる乳児にとってのあそびの意味である。一般的にあそび特性は、あそびそのものが目的をもつこととともに、自発的、主体的活動であるということがあげられる(森, 1992, p.33)。しかし、乳児の遊びは、特に初期の段階では乳児の自発的活動というよりもむしろおとなからの働きかけによって引き起こされることが多い。もちろん乳児のかわいらしさや魅力、泣き声がおとなをひきつけるのではあるが、あそびの成立にはおとなや周囲の人からの働きかけが大きな意味をもっている。おとなは乳児かわいさに思わず抱き上げたり、あやしたりして乳児と遊ぶのであるが、その中で乳児は人への関心や物への興味をもつようになる。すなわち乳児は遊んでもらう中であそびの心地よさややりとりのおもしろさを覚え、あそびへの意欲をふくらませあそびの主体者へと育っていくのである。

第二に、あそびがおこなわれるときの状態の意味である。幼児からのあそびが快の状態で行われるのに対して、乳児期では快的な状態だけでなく不快な状態のときおこなわれる場合がある。乳児とのあそびに「あやしあそび」がある。この「あやす」という言葉には「赤ん坊のきげんをとる」(梅棹忠夫・金田一

春彦・阪倉篤義・日野原重明監修 1989 日本語大辞典 講談社) という意味があるように、乳児が泣いたりぐずったりしたときにおとなが乳児の機嫌をとる形でおこなわれることが多い。乳児は不快な状態をおとなのあやしかけによって快適な状態に切り替えていくことを経験する。こうした経験により乳児はそのおとなを信頼し、そのおとなとの関係に依拠しながら次第に活動領域とともに人との関係を広げていく。幼児期の仲間との社会的あそびにとって必要な「自分と物と人」という「三項関係」の成立にも乳児期のこうしたおとなのあやしが重要といえる。

以上のように乳児にとってのあそびの意味をみると、乳児期のおとなのあそびは、子どもが遊びの主体者として育つ上で非常に重要な意味をもつといえる。したがって親たちが乳児とどのようなかわりをしていのか、どのように遊んでいるのか、さらには親自身があそび文化としてどのようなあそびを身につけているかが問われる。乳児期のあそびは、親が子どもを育てる育児文化ともいえるものである。

人が子どもや次の世代と遊ぶ場合、自分のあそび体験が原風景となる。それは保育学生が自分の幼児期のあそび体験を基盤としながら自分の成長してきた時代の流行(文化)を加味して子ども達と遊ぼうとしていることにもみられた(大元, 2004)。したがって子育て世代の親たちがどのようなあそびの原風景をもっているのかが乳児期のあそびの内容にかかわるといえる。しかし、乳児期に限定されたあそびとなれば、記憶に残っていることも少ないであろう。その上、現代の親たちは高度経済成長時代かそれ以降に生まれた世代であり、その時代はわが国が核家族、少子傾向に向かう時期であったので日常的に幼い子どもとかかわることも少なくなっていたと考えられる。1980年生まれの大阪市全児童の4か月健診から小学校入学後健診までを継続調査した「大阪レポート」では、自分の子どもを出産するまで赤ん坊の世話をしたことがないという母親が約4割、赤ん坊と遊んだことがないという母親が約2割という実態が示された(服部・原田, 1991. 原田, 1993 pp.102-105)。このような時代背景をもつ現代の親たちはどのようなあそび体験を原風景として持ち、日々わが子にかか

わり、遊んでいるのであろうか。また、乳児とのあそびの体験をもたない親たちは、あそびの手がかりは何から得るのであろうか。

以上のことをふまえ、本研究において、現代の親世代の育児文化としての乳児とのあそびがどのような形で伝達、創造されているのかについて明らかにしたい。今回は佐賀県内の保育園の保護者を中心に調査したが、人口移動が比較的少なく、育児文化の世代間伝達が都会よりも比較的高いと思われる。

方法

調査対象：佐賀県内の3保育園の保護者および子育て中の保育士126名
(回収数137名、無効数11名)

調査方法：質問紙「赤ちゃんとのあそび」について無記名による回答

結果と考察

1 回答者の背景

回答者は、女性(母親)121名(96.0%)、男性(父親)5名(4.0%)であり、母親が子育てにかかわっていることが顕著に示されていた。

また回答者の年齢については、30歳が6割を占めており(表1)、誕生年をみると1960年代半ばから1970年代前半の高度経済成長時代に生まれた世代である(表2)。その中でも、1960年代前半に誕生した人が42名と、もっとも多い

表1 回答者の現在の年齢

年代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	計
人数	31	76	18	1	126
割合	24.6%	60.3%	14.3%	0.8%	100.0%

表2 回答者の誕生年

年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	計
人数	2	60	58	6	126
割合	1.6%	47.6%	46.0%	4.8%	100.0%

層である。荒金の調査によれば、高度経済成長時代は、わが国の伝承遊びの多くが喪失したといわれる時代である（荒金，1974）。

回答者の出身県をみると（表3），佐賀県が6割以上であるが，隣県の福岡県，長崎県，熊本県を入れると，9割を超える。佐賀県内といえども必ずしも出身地と現在の居住地とは同じとは言えないが，近距離にあり，両親や親戚，知人との付き合いはあると推測できる。近隣県についても同様であろう。このことから大多数が自分の生まれ育った土地柄や風土の影響を受けて子育てをしていることが多いと考えられる。

回答者の主な養育者は，その「母親」が89名で，回答者126名中の約7割にあたる。それに対して「父親」は3名と，圧倒的に母親の育児負担が大きい。また，「祖父母」と答えた回答者は35名であり，「保育所」よりも祖父母が育児に果たしていた役割が大きいことがわかる。これらから約9割の回答者は父母や祖父母等のごく近親者からの影響をうけていると推測できる。とりわけ母親の影響が大きいであろう。

しかし，その一方で『あなたが幼い頃お母さんは家事や仕事に忙しそうでしたか。』という問いに対して，「母親が忙しそうであった」と答えている回答者は「とても忙しそうであった」まであわせると，85.4%であった（図1）。さらに『あなたが幼い頃，お母さんはあなたと遊んだり関わったりしてくれましたか。』という問いに対して，母親に遊んでもらったり関わってもらったりしたという者は81名で約6割である（図2）。なかでも「よく遊んでもらった」と記憶している者は39名で約3割にすぎない。「あまり遊んでもらったことがない」，あるいは「まったく遊んでもらったりしたことがない」という回答者は21名で16.3%いる。このことから母親だけが回答者に影響を与えているわけではないことがわかる。

表3 回答者の出身県

県名	人数	割合
佐賀	80	63.5%
福岡	18	14.3%
長崎	9	7.1%
熊本	6	4.8%
大分	1	0.8%
宮崎	1	0.8%
大阪	4	3.2%
兵庫・京都・愛知・静岡・埼玉・神奈川・千葉，各1名		
計	126	100.0%

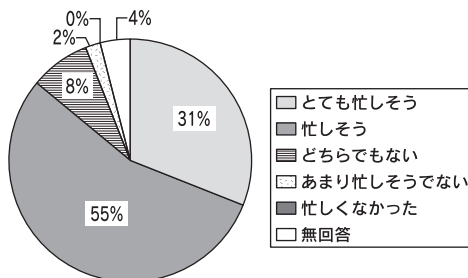


図1 回答者の母親の様子

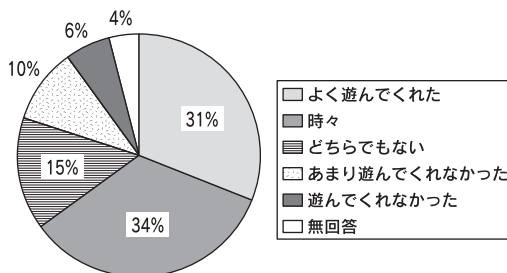


図2 乳児期の回答者への母親からのかわり

2 「赤ちゃん」の概念とあそび方について

(1) 親の考える「赤ちゃん」の年齢

「乳児」は1歳未満児をさすが、1歳以上であっても離乳、直立二足歩行、トイレトレーニングが完了していない子どもも多く、そのため親たちが手をかけ「赤ちゃん」として子どもを扱うことが多くなる。保育所においても、「乳児保育」の対象は3歳未満児となっており、保育士の配置基準も保育内容も3歳以上のものとは異なっている。しかし、対象が何歳(何か月)であるかということとどのような遊びをするかということは大いに関係がある。そこで、親たちが乳児に対して頭に描いてる年齢が何歳(何か月)かを把握する必要がある。

「「赤ちゃん」はどのくらいの子どものまでか」という問いに対して、親は平均すれば約1歳10か月までの子どもを「赤ちゃん」としてとらえている。しかし、

回答には0歳11か月から4歳までとかなりの幅があり、したがって「赤ちゃんとのあそび」にもいわゆる乳児の発達段階以上のものがあげられていると思われる。

(2) 子どもの年齢や人数と乳児との遊び方

回答者の実子の年齢は、現在0歳から21歳までとかなりの年齢幅がみられ、平均すれば5.1歳であった。また、子どもの人数については、1人から5人までの幅があり、平均すれば2.1人であった。家庭によって、子どもの数も年齢構成も異なり、すでに「赤ちゃんではない」子どもばかりだという家庭もある。そこで、現在の乳児とのあそびやかかわりだけでなく、過去においての乳児とのあそびについても尋ねた。

『赤ちゃんとは遊びますか、または遊びましたか』という問いに対して、「あまり遊ばない」「遊ばない」という回答者が3名いることは気がかりであるが、回答者の52.4%が「よく遊ぶ」と回答し、「時々遊ぶ」も含めると95.3%の者が乳児とかかかわっている(表4)。回答の中にきょうだいで遊んでいるというというものもあり、子どもの人数が多いところでは親だけでなくきょうだいとのかかわりがあることが示されていた。

(3) どんなとき乳児と遊ぶか

親たちはどのように乳児とかかわる時間を作り出しているのだろうか。『いつの時間帯、または、赤ちゃんがどんな状態のとき遊んでいるのか』という問に対する自由記述は、表5-1～表5-3のようにまとめられる。

乳児の機嫌や状態の記述をみると、機嫌が良い時だけでなく、悪い時もあげており、乳児のあそびがぐずったり泣いたりしたときにあやす役割をしている。また、「遊んで欲しそうなとき」という回答もあり、親たちが乳児の表情やそぶり等を気づかっている様子がわかる。なかには「(赤ちゃんが)ひと

表4 赤ちゃん遊ぶか

項目	人数	割合
よく遊ぶ	66	51.2%
時々遊ぶ	54	41.9%
あまり遊ばない	2	1.6%
遊ばない	1	0.8%
無回答	3	2.3%
計	129	100.0%

りで遊んでいるとかawaiiそうに思える」という記述もあり、乳児に意識的に関わろうとする親の気持ちが表れていた。

一日の時間帯でみると、過去の産後休暇や育児休暇中も含めての回答であったので「昼間」という回答が36.5%と最も多かった。また保育所の保護者であることから現在働いている親たちがほとんどなので、「夕方」や「夜」という回答も多く、合わせて27.0%であった。回答の中に、「一日中」、「休日」という大まかな記述が見られた。非常にあいまいな表現で意識して子どもとかかわっていないかのようなのであるが、乳児とともにいる生活の表れとみることができる。親たちは気持ちの上では四六時中子どもにかかわっているであろう。

ところが、活動の区切りでみると（表5 - 3）、子どもの生活リズムの区切り（44.2%）よりも、おとなの家事や仕事の都合による時間の区切りかたで乳児とかかわっている（53.2%）。今回の調査は自由記述であるので、時間帯と活動の区切りとを明確に関係づけることはできないが、親と乳児とのあそびは子どもの都合よりもおとなの都合が優先される面があるといえる。前述の「一日中」という記述も家事や仕事の合間で、いつという意識なく乳児にかかわっているということを示しているといえる。

3 知っている乳児とのあそびの特徴

乳児とのあそびについて、知っているあそびを自由に記述してもらい、それ

表5 - 1 赤ちゃんといつあそぶか
(自由記述)...乳児の機嫌・状態

項目	人数	割合
機嫌の良い時	18	40.0%
機嫌の悪いとき	14	31.1%
遊んで欲しそうな時	8	17.8%
一人で遊んでいる時	5	11.1%
計	45	100.0%

表5 - 2 赤ちゃんといつ遊ぶか
(自由記述)...時間帯

項目	人数	割合
一日中	5	7.9%
休日	11	17.5%
午前	6	9.5%
昼	23	36.5%
夕方	8	12.7%
夜	9	14.3%
休日午後	1	1.6%
計	63	100.0%

表5-3 赤ちゃんといつあそぶか(自由記述)...活動の区切り

項 目		人数	割 合	小計	割 合
おとなの都合	家事の合間・時間のある時	27	35.1%		
	保育園に行く前	4	5.2%		
	保育園の迎え時	1	1.3%		
	帰宅後	6	7.8%		
	夕食準備後	2	2.6%		
	気が向けば	1	1.3%	41	53.2%
子どもの活動	夜寝る前	16	20.8%		
	夕食後	6	7.8%		
	食事前後	1	1.3%		
	午睡前・後	4	5.2%		
	授乳後	2	2.6%		
	入浴前・中・後	4	5.2%		
	おむつ替え時	1	1.3%	34	44.2%
その他	TVで遊戯をしている時	1	1.3%		
	友人の子どもが来たとき	1	1.3%	2	2.6%
記 入 総 数		77	100.0%	77	100.0%

を分類した。回答者の記述は「わらべうた」「砂遊び」等あそび概念で記入したり、「いないいないばあ」「一本橋こちょこちょ」等と名称であげたり、「テレビの子ども番組の歌や踊りを赤ちゃんと一緒にする」「抱っこしてぐるぐる回す」等のように具体的な遊び方を記述したりする等、一様ではなかった。そこで、それら記述されたあそびのうち個別の名称や遊び方を表6のようにグルーピングした。さらにそのあそびを知っていると記述された数を表7にまとめた。ここから、親たちが知っている乳児とのあそびについて以下のような特徴がみられた。

(1) 身体を使ったり、身体がふれあうあそび

親たちは乳児と身体をふれあったり身体を使うあそびをよく知っている。「たかいたかい」や「ひこうき(仰向けになったおとなの足に子どもをのせてゆらす等)」「トンネル(おとなの足の下をこどもにくぐらせる等)」という「おとなの身体を使う運動あそび」がもっとも多く、8割以上101名であった。次に「1本橋こちょこよ」「げんこつ山のたぬきさん」等の「手遊び・わらべ

歌あそび」が126名44.4%であった。マッサージや「あんよはじょうず」などの「赤ちゃん体操や体育的運動あそび」が同35.7%、「じゃれあいあそび」が同34.9%等である。「歌・歌いながら何かをする」同41.3%というあそびの内訳も、歌いながら抱っこしてゆらすや、おんぶして散歩するなど身体と触れ合っているあそびをあげている。これらの身体を使ったあそびを合計すると298で延べ数533中の55.9%を占める。

あそびの個別名で多かったのは、「たかいたかい」(27)や、「ぎっこんぱったん」または「シーソーあそび」(おとなの足の上に子どもをのせ子どもの両手をもって体を起こしたり倒したりする)(19)であった。

しかし、「身体木登り」「ひざピョンピョン」「両手をもってジャンプ」「自分の足の上に乗せて歩く」「おいかけっこ」「けんけんぱー」という歩行が確立した幼児でなければできないあそびもあげられており、回答者の「赤ちゃん」の概念の違いがあらわれていた。

(2) 乳児と向かい合うあそび

あそびの個別名では「いないいないばあ」が最も多く、55あげられていた。「いないいないばあ」に代表される「かくれあそび」(126名中46.0%)では、なかには乳児の後ろから目を手で隠してとあそんだりかくれんぼのように姿そのものを隠すというあそび方もあるが、多くは乳児と向かい合っているあそびになる。先にあげた「手遊び・わらべ歌あそび」も多くが乳児と向かい合うあそびである。さらに「にらめっこ」や「あっぷっぷ」など「顔・表情あそび」についても乳児と顔と顔を向かい合っているあそびである。身体を使ったあそびのなかにも「たかいたかい」や「シーソーあそび」のように向かい合うあそびはみられる。これらを合計すると164で全体延べ数533中の30.8%を占める。

(3) 歌やことばを使うあそび

乳児とのあそびでは、歌やことばを使うあそびも多くあげられていた。先にあげた「手遊び・わらべ歌あそび」も手や指あそびに歌やかけことばがはいっているあそびであり、「歌・歌いながら何かする」というあそび(126名中41.3%)についても歌が重要な要素である。その他「絵本」の読み聞かせ(同30.2%)

表6 個別のあそびの分類

あそびの分類	具体的なあそびの名称・遊び方
かくれあそび	いないいないばあ、かくれんぼ
手遊び、わらべ歌	あがり目さがり目、げんこつ山のためきさん、一本橋こちょこちょ、おつむてんてん、ちょちょちあわわ、大きな栗の木の下で、むすんでひらいて、せっせっせ、グーパー、手を叩いて歌のリズムをとる、どっちの手、馬はとしとし、糸巻き
絵本	絵本の読み聞かせ
歌・歌いながら何かをする	テレビの歌を歌う、歌いながらあやす、歌いながらダンス、歌いながら体操、歌いながら散歩、おんぶして子守唄、曲を流して歌う
お話	抱っこして話しかける
音を出す	ガラガラなど音の出るもので遊ぶ、ピアノをひく、舌をならす、音楽をならして体を動かす
顔、表情あそび	べろべろばー、あっぱっぱ、にらめっこ、鏡の前でお話
じゃれあい・子どもの体に触れる	お腹をプーッとする、額をつつく、身体を食べるまね、口に手をあててアーっという、「あんよ」「おてて」と身体をさす、指で赤ちゃんの手足をつつく、ふとんでごろごろ、おすもう、くすぐり、すきすき類ずり
大人の身体を使う運動あそび	たかいたかい、おんぶ、(体で)シーソー、抱っこしてぐるぐる回し、抱っこして揺らす、抱っこして走る、トンネル、ぎっこんぱったん、ひざピョンピョン、身体木登り、ひざすべり台、おうま、ポートこぎごっこ、両手をもってジャンプ、ひこうき、自分の足の上に乗せて歩く、おっぱいを飲ませながら手をおっぱいに乗せリズムをとる、二人で交互に渡しあう
赤ちゃん体操・体育的運動あそび	身体のマッサージ、手を振って上下する、バンザイ、体操、バスタオルにのせてゆらす、あんよは上手、おいでおいで、おいかけっこ、けんけんばー
外あそび	公園に行く、散歩、砂あそび、水あそび、シャボン玉、電車を見に行く
おもちゃや物で遊ぶ	積み木、ボール転がし、物の出し入れ、タオルやハンカチを揺らす、ガーゼのひっぱりっこ、物を壊す、ブロック、豆、メリケン粉、米をぐちゃぐちゃにする、カルタ、三輪車、乗り物、音のするおもちゃをひっぱる、紙を破る、風呂でおもちゃで遊ぶ
虚構あそび	ぬいぐるみで話しかける、人形ごっこ、動物のまね、ごっこあそび、ままごと、電車ごっこ
その他	ありさんとことこ、子育てサークルで同じ年頃の子どもと遊ぶ

表7 知っているあそび（あそびの延べ数533）

あそびの分類	かくれあそび	手あそび、わらべ歌	絵本	歌、歌いながら何かをする	お話	音を出す	顔、表情あそび	じゃれあい、子どもの体に触れる	動あそび	大人の身体を使う運動あそび・体育	赤ちゃん体操・体育	外遊び	おもちゃや物で遊ぶ	虚構あそび	その他	回答者数
知っている人数	58 46.0%	56 44.4%	38 30.2%	52 41.3%	8 6.3%	16 12.7%	5 4.0%	44 34.9%	101 80.2%	45 35.7%	27 21.4%	61 48.4%	20 15.9%	2 1.6%	126 100%	
どのようにして知ったか																
自分の経験	13 22.4%	13 22.8%	13 34.2%	11 21.2%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	6 14.0%	46 45.5%	7 15.6%	5 18.5%	8 13.1%	0 0.0%	0 0.0%	123	
身近な人を見て	34 58.6%	19 33.3%	3 7.9%	9 17.3%	2 25.0%	8 50.0%	1 20.0%	8 18.6%	31 30.7%	8 17.8%	6 22.2%	6 9.8%	3 15.0%	0 0.0%	138	
学校で	0 0.0%	3 5.3%	2 5.3%	2 3.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.3%	0 0.0%	2 4.4%	0 0.0%	3 4.9%	0 0.0%	0 0.0%	13	
妊婦教室	0 0.0%	0 0.0%	2 5.3%	2 3.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 13.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10	
子育てサークル	0 0.0%	3 5.3%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 3.3%	0 0.0%	1 50.0%	8	
友人	0 0.0%	2 3.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.6%	1 5.0%	0 0.0%	4	
本	0 0.0%	1 1.8%	0 0.0%	2 3.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 6.7%	0 0.0%	1 1.6%	0 0.0%	0 0.0%	7	
テレビ・ビデオ	1 1.7%	9 15.8%	1 2.6%	8 15.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 4.0%	5 11.1%	0 0.0%	6 9.8%	1 5.0%	0 0.0%	35	
自分で	0 0.0%	1 1.8%	4 10.5%	3 5.8%	2 25.0%	3 18.8%	0 0.0%	12 27.3%	5 5.0%	4 8.9%	1 3.7%	6 9.8%	3 15.0%	1 50.0%	45	
なんとなく	6 10.3%	0 0.0%	6 15.8%	10 19.2%	3 37.5%	5 31.3%	3 60.0%	15 34.9%	11 10.9%	5 11.1%	11 40.7%	18 29.5%	10 50.0%	0 0.0%	103	
その他	2 3.4%	3 5.3%	3 7.9%	3 5.8%	0 0.0%	0 0.0%	1 20.0%	2 4.7%	0 0.0%	4 8.9%	2 7.4%	7 11.5%	2 10.0%	0 0.0%	29	
無回答	2 3.4%	2 3.5%	3 7.9%	2 3.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 3.0%	1 2.2%	2 7.4%	3 4.9%	0 0.0%	0 0.0%	18	

お話 8 (同6.3%)も当然ながらおとなから乳児にことばをかけることが重要である。これらのあそびを合計すると155で、全体延べ数533中の29.1%を占める。

(4) おもちゃを使うあそび

「おもちゃや物を使うあそび」も多く見られる(126名中48.4%)。10か月前後の乳児が「自分と物と人」との三項関係を築いていく上で、人との関係や触れ合いだけでなくおもちゃや物との関係をつくり、おとなとおもちゃを共有して遊ぶ活動は重要である。しかし、「ボール転がし」「ハンカチを顔の上でゆらす」「物を出したり入れたりする」等の乳児期のあそびの他に「カルタ」や「絵本の絵の色にあわせて同じ色のブロックを置く」や「三輪車」、「乗り物」という幼児のあそびもあげられていた。先に見たように親によって「赤ちゃん」の概念が異なり、それによってあげられるあそびにずれが感じられる。

4 乳児とのあそびをどのようにして知ったか

以上のあそびについて、回答者たちがどのようにして知ったかということを探った。その結果は表7のとおりであるが、これらから以下のような特徴がみられた。

(1) 身近な人からの伝承によるあそび

乳児とのあそびは「自分の父母や祖父母など身近な人が遊んでいるのを見て覚えた」(以下、「身近な人から」)がもっとも多く、138(延べ数533中25.9%)であった。次に「自分が遊んでもらったのを覚えている」(以下、「自分の体験から」というのが123(同23.1%)であった。「げんこつ山のたぬきさん」、「一本橋こちょこちょ」「ぎっこんぱったん」等乳児期だけのあそびというよりも幼児になっても遊ぶような「手遊びやわらべ歌」やおとなと身体を使うあそびが多かったため記憶されていたものと思われる。中には幼児のあそびをあげている場合もあり自分が比較的幼い頃遊んでもらって楽しかったあそびとして記憶に残っているのであろう。

特にあそびでもっとも遊ばれていた「いないいないばあ」は34名が「身近な人」をあげており、中には自分が遊んでもらったのを覚えているという者も12

名いる。一般的に「いないいないばあ」をしてあそぶ時期は0歳児後半から1歳にかけてであるので、遊んでもらった記憶があるということについては不明な点が多い。しかし「遊んでもらった」と確信できるような身近なおとなとの強いつながりや経験をもっていたと推測できる。また、回答者の周囲に幼い子どもがおり、その子どもへのおとなたちのかかわりを見聞きする機会があったことがわかる。

このように子育て世代が乳児とのあそびを身につけることには、自分の実体験や身近であそびを見たり聞いたりするなどの経験が大きな役割を果たしている。自分の遊んでもらったあそびを自分の子どもにも遊んであげているというあそび文化の伝承がみられる。これは、自分の出身県やその近辺に居住しているという土地柄によるところもあるであろう。

自分が母親から遊んでもらったかどうかということと、あそびをどれくらい知っているかということの関係を調べたみたが、相関はみられなかった。

(2) 自分で考えたり創り出したりするあそび

あそびは伝承によるだけでなく、自ら創造していく面もある。また、誰からとかどこでとか明確な記憶はないが、乳児とかかわるなかでいつの間にかかわりかたや遊びかたを身につけるといふこともある。回答をみると「なんとなく」は103（延べ数533中19.3%）で、「身近な人から」と「自分の体験から」に続いて多い。「なんとなく」身につけたあそびには、「おもちゃや物を使うあそび」が多いが、その他に「じゃれあいあそび」、「おとなの身体を使う運動あそび」「外あそび」等である。「かくれあそび」のなかでも、子どもに顔を隠しておいて、「『ばあ』と顔を出すと子どもがとても喜ぶことがわかりよく遊んだ」と記入している回答もあり、「いないいないばあ」と自覚したわけではないが結果的に伝承あそびの「いないいないばあ」を乳児とあそんでいる。

また、「自分で考えた」という回答は全部で45（同8.5%）と「なんとなく」に続いて多くみられた。そのなかでも「じゃれあいあそび」が多かった。これらも、乳児をあやしたりとかかわったりしている内、子どもの反応がよくて喜んでくれたあそびを自然に身につけたのであろう。

(3) テレビによる「手あそび」「歌あそび」

最近乳児の早期からのテレビの視聴が問題視されているが、回答者にも「テレビ・ビデオから知った」という回答が35（延べ数533中6.51%）あった。

別項目の『赤ちゃんにテレビやビデオを見せますか、あるいは見せましたか』という質問に対して、表8のような結果であった。前記に示したとおり、回答者によって「赤ちゃん」の概念が大きく異なるので、まったくの「乳児」でない可能性はあるが、よく見せる（見せた）という回答が28名（22.2%）あり、時々見せるの64名（50.8%）と合わせると7割以上が「赤ちゃん」にテレビやビデオをみせている。保育所の保護者であるので、夕方帰宅後の母親は家事で特に忙しい。乳児と遊ぶ時間が「家事の合間」や「夕食後」という回答が多くみられたが、忙しくて乳児の相手ができない時間はテレビやビデオを見せることになるのであろう。

どのようなあそびをテレビやビデオから影響を受けるかということでは、身体をつかったりふれあったりするあそびよりも、「手あそび・わらべ歌あそび」や「歌・歌いながらなにかをする」というあそびが多くみられた。なかには子どもと一緒にテレビの歌や踊りにあわせて遊んでいるという回答もあるように現代の「手あそび・わらべ歌あそび」や「歌」などを身につける上でテレビやビデオが大きな役割を果たしている。特に、自分の経験や身近な人からの影響を受けることができなかった人たちにはテレビが大きな位置を占めるといえる。

(4) 妊婦教室や母親教室からは「赤ちゃん体操」

「妊婦教室・母親教室」から学んだという回答は、全体としても10（1.9%）と少ない。あまり妊婦教室や母親教室の占めるわりあいは多くないが、そのなかでも「おとなの身体を使うあそび」や「じゃれあいあそび」のようなおとなも乳児も楽しむあそびよりも「赤ちゃん体操」「マッサージ」

表8 乳児のテレビの視聴

項目	人数	割合
よく見せる	28	22.2%
時々見せる	64	50.8%
あまり見せない	28	22.2%
全く見せない	2	1.6%
無回答	4	3.2%
計	126	100.0%

という子どもの健康増進や発達を促す側面のおそびが多い。もちろん自分で考えたり、なんとなく遊んでいるという回答もあるが、妊婦教室で学んだ乳児の健康や発達にのぞましい体操やマッサージが生かされているとみることができる。

(5) 無回答者について

無記入者が126名中、14名あった。その中には、乳児と「一日中」かかわると回答したのも含まれている。いろいろありすぎて書き留めることができない、めんどろということかもしれないが、何をどのように遊んだか、あるいは遊んでいるかをはっきりと記憶していないということでもある。特によく遊んでいるおそびをあげられていないということは、それだけ乳児とのかかわりが意識化されておらずあいまいなかかわり方になっていることを表している。

5 乳児と遊ぶときのところがけていることやその時の気持ち

(1) 乳児とのおそびでところがけていること

回答者が乳児と遊ぶときどのようなことに心がけているのかをまとめたものが図3である。『思わずあやしたり遊んだりする』ということでは、76名(60.3%)が強くそう思うと回答し、どちらかと言えばそう思うという回答42名(33.3%)と合わせると9割以上になる。回答者たちはあまり深く考えたり、構えたりせず、自然なきもちで乳児とかかわっていることがわかる。しかしその一方で、『特にところがけていることはない』ということには、どちらでもないという回答がもっとも多く、46(36.5%)ではあるが、あまりそう思わないが22(17.5%)、まったくそう思わないが17(13.5%)と、39名(31.0%)のものが何も考えていないわけではないことを主張している。

では、どのような点をところがけて親たちは乳児と遊ぶのであろうか。『赤ちゃんと遊ぶのは親の務めだと思う』ということでは強くそう思う者が51名(40.5%)、どちらかといえばそう思うが53名(9.5%)であり、8割以上が親としての自覚をもってかかわっていることが明らかである。

また、『赤ちゃんの目や表情』に気を配っているものは、「強くそう思う」が

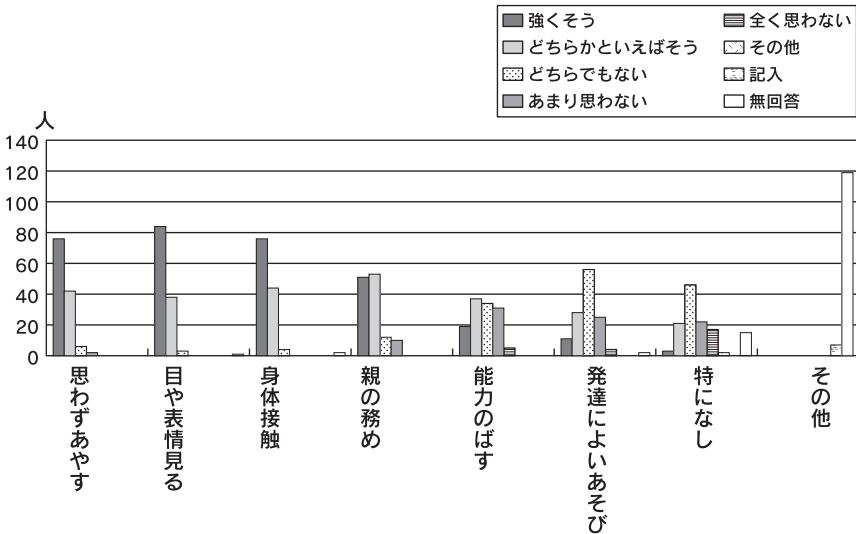


図3 乳児と遊ぶときこころがけていること

84名 (66.7%), 「どちらかといえばそう思う」が38名 (30.2%) と、合わせると122名 (96.9%) である。『赤ちゃんとの身体接触到に努める』についても、同じく76名 (60.3%) と44名 (34.9%), 合わせて120名 (95.2%) であった。この親たちの思いは上記の乳児とのあそびの分類の際に同様の傾向が見えた。すなわち乳児と向かい合っのあそびや身体接触・ふれあいをするあそびを数多くあげていたことと一致する。

それに対して、乳児の能力や発達を促すようなあそびについては、あまり重点をおいていないようである。『能力や才能をのばすように心がけている』については「強くそう思う」は19 (15.1%), 「どちらかといえばそう思う」は37 (29.4%) であるのに対して、「どちらでもない」が34 (27.0%), 「あまりそう思わない」が31 (24.6%)。「全く思わない」5 (4.0%) と、消極的な様子が見える。『発達にとってよいと思われるあそび』についても「どちらでもない」が56 (44.4%) で、「あまりそう思わない」が25 (19.8%), 「まったく思わない」は4 (3.2%) と消極的である。親たちは乳児との触れ合いに重点をおき、

子どもが喜ぶあそびをし、子どもとのあそびを楽しんでいる様子が見える。

(2) 乳児と遊ぶときの気持ち

上記から回答者は親としての自覚をもちつつ、乳児との身体接触や向かい合っ
てのあそびを心がけているようであるが、その時の気持ちはどのようであらう
か。図4のように、ほとんどの人が乳児とのあそびを楽しんでいることがわか
る。『赤ちゃんとのあそびは楽しい』ということについては、「強くそう思う」
が73名(57.9%)で、「どちらかといえばそう思う」が45名(35.7%)あり、
合わせて118名(93.6%)である。『赤ちゃんがかわいく思える』についても同
じく93名(73.8%)と32名(25.4%)で125名(99.2%)と圧倒的に赤ちゃんとの
あそびを楽しんでいる。

『どのようにして遊んだらよいかよいかわからなくて困った』について
は、「どちらかといえばそう思う」という回答が19名(15.1%)いるが、「あま
りそう思わない」66名(52.4%)、「まったくそう思わない」が22名(17.5%)
で約7割が乳児とのあそびに困っていない。また、『赤ちゃんに対してかわい
いとは思えない』については「あまりそう思わない」が31名(24.6%)、「まっ

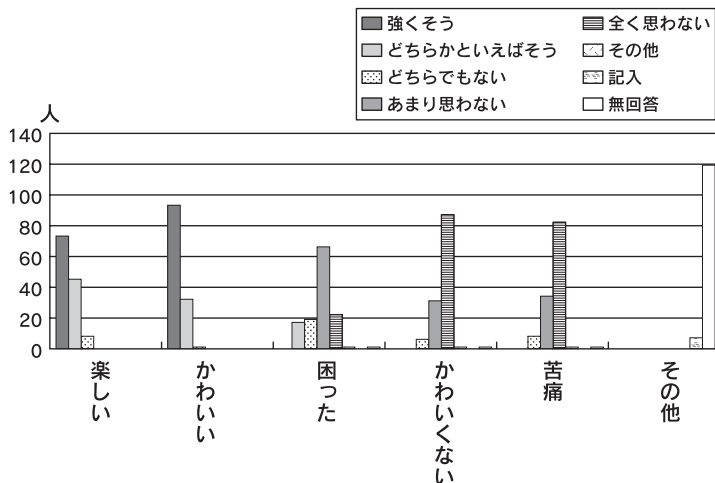


図4 乳児と遊んだときの気持ち

たくそう思わない」が87名 (69.0%) で、『とても苦痛だ』についても同様に34名 (27.0%), 82名 (65.1%) とどちらも9割以上が「そう思わない」と回答している。

また、質問紙の最後の自由記述の中に以下のような乳児とのあそびを楽しんでいる親の声があった。

- ・両手両足をびんと上げおなかをつけてよく飛行機をしていたこと。その時の笑顔がとてもかわいかった。
- ・いないいないばあ遊びや歌遊びはとにかく笑顔が出てとても楽しそうにしていました。
- ・一緒に遊んでいたら赤ちゃんが面白がって何度もせがむのでとっても楽しくて嬉しくて何度も同じ動作をした。
- ・飛行機ブーンやお人形を出したり隠したりしての遊びも子どもは声を出して喜んでいました。
- ・「はんきゅうとつきゅう」と言う歌を良く歌ってあげました。これを歌うといつもニコニコ笑って喜んでいました。そのせいか今は電車が大好きです。
- ・雨ふれふれと歌って、ピチピチチャブチャブランランと歌うところでいつも笑い声を上げていたことを思い出します。
- ・遊ぶときの笑顔が思い出。

さらに、乳児の能力や発達の様子について、以下のような驚きや感動の声も書かれていた。

- ・自分の足であるけるようになって、すべりだいをすべっておどろいた顔をした様子が印象に残っている。
- ・店にあったポスターに犬がのってて、子どもに「ワンワンだよ」って何回か言って教えたたら、本物の犬を見て「ワンワン」って子どもが言ったときはびっくりしました。本物を見たのはその時だったんですよ。それからは「ワンワン」って言います。
- ・遊びというのではないのですが、1月ほど発達の遅れた末娘がもうハイハイしないのかと思っていたら、ベビーベッドを片付けて床に布団をしいて寝かせるようにしたら、兄たちに触られたりして急激に発達が早くなり、はいはいを始めたので不思議というか刺激で大切！と感じました。それまでは忙しさにかまけて寝ていてくれるなら寝かせていることが多かったのです。
- ・寝返り競争は、もう少しでできるのにできなかったのが始めたもので、親がぐるぐる回っているところを何度も見せ、「こうよこうよ」と手足の使い方を教え、突然ぐるぐる回って見せてくれ、ニコニコの娘を見た時は感激でした。その後は父母と一緒にぐるぐる回る日を過ごしたことです。
- ・コチョコチョコ遊びをしていたら、子どもがされるのを待ってにやーと笑うようになった。くり返すことで楽しさを覚えているのが目に見えて面白かった。その後私が昼寝をしている時などにも「コチョコチョコ」と言ってくすぐってくる仕草はとてもかわいらしかった。

これらのことから、親たちは乳児をかわいいと思い、子どもの意外な能力や発達に感動しながら乳児とのかかわりやあそびを楽しんでいることがわかる。このことは知っているあそびが豊富に列挙された前記のまとめからもうかがえる。

まとめと課題

親たちが遊ぶ乳児とのあそびには自分の身近な人に遊んでもらったり、遊んでいるのを見たりした経験が重要であった。特に自分の記憶にない乳児期のあそびについては、見たり聞いたりすることができる乳児やおとなの存在が大きな意味をもっている。すなわちあそび文化としての伝承がなされているのである。それだけでなく親たちは実際に乳児とかかわるなかで乳児が喜ぶあそびを発見し、創り出していた。しかしその下敷きには、自分自身のあそび経験が原風景としてあるようである。それは乳児とのあそびを楽しめる親たちの記述にも見られた。

今回の調査は都市部ではなく、自分の生まれ育ったところとあまり離れていなかったため自分の身近な人との経験があそびに反映されていた。都市部のように自分の故郷を離れて子育てしている親たちの場合は、乳児とのあそびについて今回の結果と違った様相を示すであろう。ますます進む少子社会にあって、これからの親たちは原体験としてのあそび文化を持つことができにくくなり、わが子とのあそびを何から学んでどのように遊ぶかということについて変化が見られてくるであろう。乳児とのあそび文化の伝承について今後調査の範囲を拡大して検討する必要がある。

親たちが知っている乳児とのあそびには、乳児と身体で触れ合ったり向かい合うあそびが多い。これは一般的に乳児と遊ぶときに大切にされる点でもある。そのなかでも「いないいないばあ」や「たかいたかい」「ぎっこんぱったん」など昔から遊ばれているあそびが多くあげられていた。それには自分の体験や身近な人のあそびを見る経験が影響していた。ところが、「昔からの乳児とのあそび」として紹介され、乳児とのあそびの本などにも紹介されている「チヨ

「チヨチアワワ」については1名しか記述がなかった。『チヨチチヨチアワワを知っていますか』という質問には、126名中「知っている」者は14名(10.9%)で、「名前だけは知っているが具体的には知らない」という人を入れても26名(20.3%)であった。また、知っている「チヨチチヨチアワワ」をどのような歌と動作かを記述してもらうと、様々であった。今回、知っている数変わらずであったため、今後「チヨチチヨチアワワ」について、どのような実態があるのか、また遊ばれていないならばそれはなぜなのかということさをさぐっていききたい。さらに乳児とのあそびで現代遊ばれるあそびと遊ばれなくなったあそびの違いがどこにあるのか、これからどのようなあそびが親世代に受け入れられ、あそび文化として次世代に伝えられていくのかを探っていききたい。

引用・参考文献

- 荒金 学 1974 消えた竹とんぼ 西日本新聞社
服部祥子・原田正文 1991 乳幼児の心身発達と環境：大阪レポートと精神医学的視点
名古屋大学出版会
原田正文 1993 育児不安を超えて 思春期に花ひらく子育て 朱鷺書房
大元千種 2004 保育学生の幼児期における遊び体験に関する考察 筑紫女学園大学紀
要第16号 pp.249-268